

# 書写と書道の一貫性のあり方に関する研究

—— 児童、生徒の毛筆への意識と表現力を中心として ——

平成16年度 東京学芸大学附属学校プロジェクト研究Ⅲ

東京学芸大学附属高等学校 荒井 一 浩

東京学芸大学 加藤 泰 弘

東京学芸大学附属世田谷小学校 中村 和 弘

東京学芸大学附属竹早中学校 松本 貴 子

## 目 次

1. はじめに	32
2. 毛筆の効用について —— 四つの観点から	32
3. 本研究における役割分担	33
4. 調査の概要	33
5. 調査結果 —— 分析と考察	37
6. おわりに —— 今後の方向性	44

# 書写と書道の一貫性のあり方に関する研究

—児童、生徒の毛筆への意識と表現力を中心として—

平成16年度東京学芸大学附属学校研究会プロジェクト研究Ⅲ

東京学芸大学附属高等学校 荒井一浩

東京学芸大学 加藤泰弘

東京学芸大学附属世田谷小学校 中村和弘

東京学芸大学附属竹早中学校 松本貴子

## 1 はじめに

### 1.1 現代という時代

高度情報通信ネットワーク社会が急速に形成されつつある現代に生きるわれわれは、不易と流行をしっかりと見つめ、整理し、捉えようとする努力をしなければならない。文部科学省は「2005年度までに、すべての小中高등학교等が各学級の授業においてコンピュータを活用できる環境を整備する」ことを目標に教育用コンピュータの整備や教員の研修などハード、ソフトの両面から充実を図ろうとしている。また、家庭へのパーソナルコンピュータの普及率も急速な伸びを見せ、インターネット白書2004によればインターネットの世帯普及率は52.1%と過半数を超えた。街ではケータイを片手にメールを打つ姿が当たり前に見られるようになってきている。こうした中で「文字を手で書くこと」そして「毛筆の存在」はどう変容し、これからどのような方向に向かっていくと考えればよいのだろうか。

### 1.2 本質論と有効性

学校教育にとって「なぜ、この教科・科目を学ぶ必要があるのか」「この学習を進める意味はどこにあるのか」といった本質論は避けて通れない。そして、その教育に携わる者にとって、「この学習活動を通して児童や生徒がこう変わっていくのだ」「そこで身につけた能力がこういった面で生きてくるのだ」という有効性を説明することも大きな使命であると言ってよい。書写書道に翻って考えれば、「この高度情報化社会において、あえて手書き文字を時間をかけて身につけさせようとするのか」「その習得の過程で毛筆を用いることの意味はどこにあるのか」「書写力を身につけるとどのような有効性があるのか」などと言うことになるであろう。古く文字を書くのは毛筆と決まっていた。日本語ワープロの一号機は昭和54年に発売されるが、一般的には昭和の時代までは手書きであった。しかし、この十数年で文字を書き、記録し、伝達する姿は大きく変わってきている。

### 1.3 研究の契機

先人の努力により、書写書道は教育課程の中にしっかりと位置づけられてきた。多少の動静はあろうとも、その重要性は理解されてきたとみてよいだろう。しかし、大きな社会的変革を目の当たりにし、これからも同様とは考えられない。これからの書写書道のあり方を模索していくためにも、毛筆を中心に児童、生徒の意識を探り、基礎的な表現力を見ていくことは有効かつ不可欠なことだと考えた。

## 2 毛筆の効用について — 四つの観点から

### 2.1 毛筆の存在とその効用

毛筆の存在意義を次の四点に集約して捉えてみた。

#### (1) 文字習得の教具として

小学校3年生から位置づけられている毛筆を用いた学習は、中学校国語科書写そして高等学校の芸術科書道へと続いていく。特に小学校段階では、文字習得の教具として、「大きく書くことにより細部を確かめながら書く」「毛

筆の弾力を生かしてリズムカルに書く」「一点一画でいねいに書く」などにより、硬筆との関連、日常に生きて働く書写力の育成に寄与しているものとする。

#### (2) 日常生活に潤いをもたらすものとして

われわれは、日常生活のあらゆる場面で毛筆により表現された文字を見ている。新聞の題字、和食の看板、メニュー、のし、賞状……。多くの印字された宛名の中に、丁寧に書かれた毛筆の文字を見つけたときの喜び、ましてや毛筆で書かれた手紙をいただいたときの感情。毛筆で書かれた文字には暖かみを感じるなど活字はもとより硬筆の手書き文字をも越えたものを与える力がある。

#### (3) 文化的、歴史的な存在として

概ね近代を迎えるまで、文字は毛筆により書かれていた。漢字、平仮名、片仮名とも毛筆で書くことにより成立しており、その規範は毛筆体にある。また、現代でもっとも多く目にする活字である明朝体にさえも起筆、収筆、はね、払いなど毛筆の書きぶりを残している。

#### (4) 自己表現の手段として

人は皆、自分の思い通りに表現をしたいという欲求を持っている。毛筆は、周辺の用具・用材を工夫したり、運筆や用筆を工夫することでシンプルな色彩の中にも感興に根ざした多種多様な表現をすることができる。

上記の考え方をもとにして、各項目の重要度について児童、生徒がどの程度の意識を示すかを探るため、アンケート項目を作成した。(後掲) このアンケートと毛筆を用いた基礎的な実証調査を資料に分析・考察を試みた。

### 2.2 毛筆を用いて学習することの重要性

「毛筆は硬筆の基礎」「硬毛一体化指導」と唱われてから久しい。書写という用語が習字に取って代わってから四十数年が過ぎた。しかし、そのいずれもが定着を見たと考える人は皆無なのではあるまいか。書写書道教育関係者とそれ以外の人々との考え方の相違も大きくなってきていると指摘される。物事を習得していく過程においては、五感を働かせ、より体験的に進めることが効果的であることは多くの人の共感を得られることであろう。これからも「なぜ学ぶのか」という根元的な問いを常に抱きつつ、毛筆を用いて学習する重要性を考え、解き明かしていくことが必要だと考える。

## 3 本研究における役割分担

本研究は、東京学芸大学附属学校プロジェクト研究の指定を受け、大学と附属学校の共同研究として研究を推進した。研究の方向性、理論構築と分析・考察は荒井と加藤が、調査の実施、資料の収集は荒井、中村、松本が、そして全体の調整を荒井が行った。

## 4 調査の概要

### 4.1 調査の目的

本調査の目的は、児童・生徒が日頃、毛筆という用具にどのような考え方を持っているのか、毛筆を用いて文字を書く能力が硬筆を用いて文字を書く能力と比較してどう位置づけられるのかを少しでも明らかにしていこうという点にある。そしてその先には、双方の相関関係も念頭に置きながら、学習指導の方法に改善を加えられるとすれば何が考えられるのか、カリキュラムの重点化を図っていくとすれば、どのような方向性が見えてくるのか、といった要素について明らかにしていきたいという想いがこめられている。

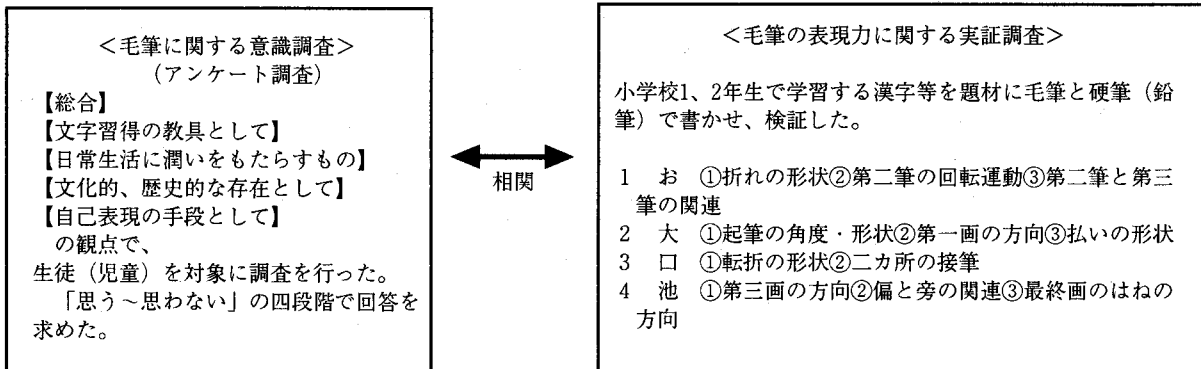
### 4.2 調査の時期と対象

調査時期 平成16年9月

調査対象 小学校(5年生)40名 中学校(1年生)79名 高等学校(1年生・書道選択者)68名  
計187名

#### 4.3 調査項目と方法

調査は、ほぼ同時に<調査1>「毛筆に関する意識調査（アンケート調査）」と<調査2>「毛筆の表現力に関する実証調査」を行った。二つの調査から導き出される結果を同じ被験者から収集することによって、その相関関係まで考察の対象として意識した。



#### 4.4 <調査1>「毛筆に関する意識調査」の調査項目

前述の四つの観点を踏まえて以下の13項目の設問を用意した。各々の設問について「思う」～「思わない」の四段階から一つを選択し、「思う」を4ポイント、「思わない」を1ポイントとして各設問ごと、各校種ごとに平均値を出し、グラフ化することを試みた。特に、小学生にとっては難解に感じる設問があるが、教員から予断を与えないよう配慮しながら補足説明を行い、設問の意図が的確に伝わるようにした。

- [設問1] 毛筆を使用して文字を書くことは好きですか。
- [設問2] 毛筆を使用して文字を書くことは得意ですか。
- [設問3] 毛筆はこれから先も使われていくと思いますか。
- [設問4] 学校での毛筆を使用した活動は楽しいですか。
- [設問5] 毛筆を使用すると点画の形や文字の字形が理解しやすいですか。
- [設問6] 毛筆で文字を書くことは難しいと感じていますか。
- [設問7] 毛筆で文字を書くことが上達すれば、硬筆の文字も上達すると思いますか。
- [設問8] 毛筆で書かれた手紙をもらおうと嬉しく感じますか。
- [設問9] 最近、授業や塾以外で毛筆を用いて文字を書いたことがありますか。
- [設問10] 日常の様々な場面（例えば和食店の看板や賞状等）で毛筆で書かれた文字が用いられていますが、それは活字より良いと思いますか。
- [設問11] 毛筆で書かれた文字は、日本の伝統文化の一つであると思いますか。
- [設問12] 毛筆は硬筆よりその人の感情や人間性が現れると思いますか。
- [設問13] 自分の感情を、毛筆を使って文字により表現することは楽しいと思いますか。

#### 4.5 <調査2>「毛筆の表現力に関する実証調査」の調査項目

資料1に提示した調査用紙を用いて、「お」「大」「口」「池」の四字について毛筆と硬筆で書字させた。「お」を選んだのは、毛筆では結びや回転運動において筆がねじれやすくなるわけだが、その部分の硬筆との相違はどれくらいであるのか、また、第二筆と第三筆の点との関連性の意識、つまり筆脈の意識が見られるかどうかを調査したいという意図である。「大」「口」「池」については、児童・生徒が難しいと感じないように小学校一年生および二年生で学習する漢字の中から、横画、縦画、折れ、左払い、右払い、点、曲がりなどの多様な基本点画

毛筆と硬筆（鉛筆）で書いてみよう

小 ・ 中 ・ 高 年 \_\_\_\_\_

I まず、指定された半紙に、次の(1)～(4)を書いてみましょう。

(1) お

(2) 大

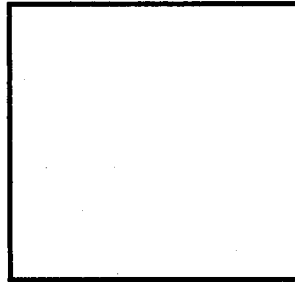
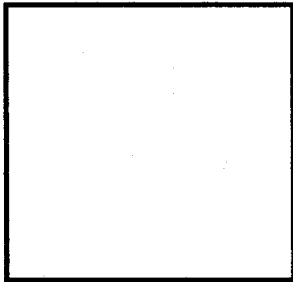
(3) 口

(4) 池

II 次に、同じ文字を枠の中に鉛筆で書いてみましょう。ただし、書き直しはできません。

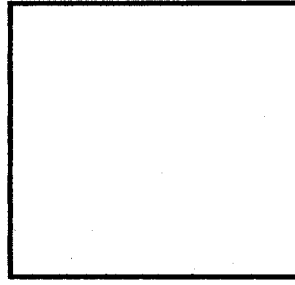
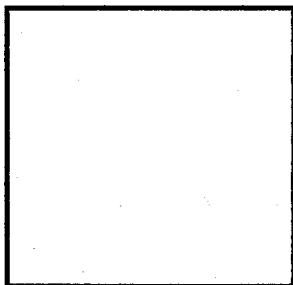
(1) お

(2) 大



(3) 口

(4) 池



【資料1】

の要素や、偏と旁の組み立てという比較的簡単な文字の組み立てが調査できる文字と考えて選定した。

まず、毛筆では半紙の縦を切断し、正方形に整形した用紙を用意し、用紙の形状に影響される文字の歪みを極力排除しようと配慮した。次に、同じ文字を硬筆（鉛筆）で一辺が3.5センチの正方形のスペースに書字させた。毛筆との条件を勘案し、枠が書字に与える影響を考えて少し大きめのスペースを確保し、書き直しはしないように指示をした。

また、収集した資料の処理は以下に列挙する三段階評価の観点を各文字について二ないし三点設定し、意識調査と同様に◎を3ポイント、○を2ポイント、△を1ポイントとして数値に置き換え、グラフ化した。

[実証調査 三段階評価の観点]

(主に毛筆の観点で記述している)

【お】

①結びの形状

- ◎ 結びを意識し、筆の方向を変えて書いている。
- 結びを意識しているが不十分である。
- △ 結びの意識が見られない。

②第二筆の回転運動

- ◎ スムーズに大きく回転している。
- 筆が大きくねじれてしまう等不十分である。
- △ 角張ってしまう等している。

③第二筆と第三筆の関連

- ◎ 関連性が明白である。
- 関連性が不十分である。
- △ 関連性が見られない。

【大】

①起筆の角度・形状

- ◎ 約45度に筆をおろし、三角形の形状ができている。
- 起筆の意識はあるが、不十分である。
- △ 起筆が意識されていない。

②第一画の方向

- ◎ やや右上がりに筆圧を保って送筆している。筆先が上方に近い部分を通っている。
- 右上がりの意識はあるが筆圧が不安定である、または筆先が画の中心付近を通っている。
- △ 右上がりになっていない。

③払いの形状

- ◎ 筆先をまとめながら、払っている。右払いでは一度止め、方向を変えている。
- 右払いで一度止めたり、方向を変えることが不十分である。
- △ 止めになっているなど、払いが意識されていない。

【口】

①転折の形状

- ◎ 横画の右端で少し筆圧を加え、しっかりと下方へ引けている。
- 転折は意識されているが、不十分である。
- △ 転折部が丸くなるなど、転折が意識されていない。

②二カ所の接筆

- ◎ 二カ所とも接筆を意識して書かれている。
- いずれか一カ所の接筆が意識されていないか不十分である。
- △ 接筆が意識されていない。

【池】

①第三画の方向・形状

- ◎ 隣の第一画の起筆に向かい、筆先をまとめてはねている。
- 方向・形状ともに不十分である。
- △ 方向・形状ともに意識されていない。

②偏と隣の関連

- ◎ 偏と隣の幅や譲り合い、隣の下部の余白などが意識して書けている。
- 偏と隣の関連は意識されているが、不十分である。
- △ 偏と隣が同じ幅になるなど、偏と隣の関連が図られていない。

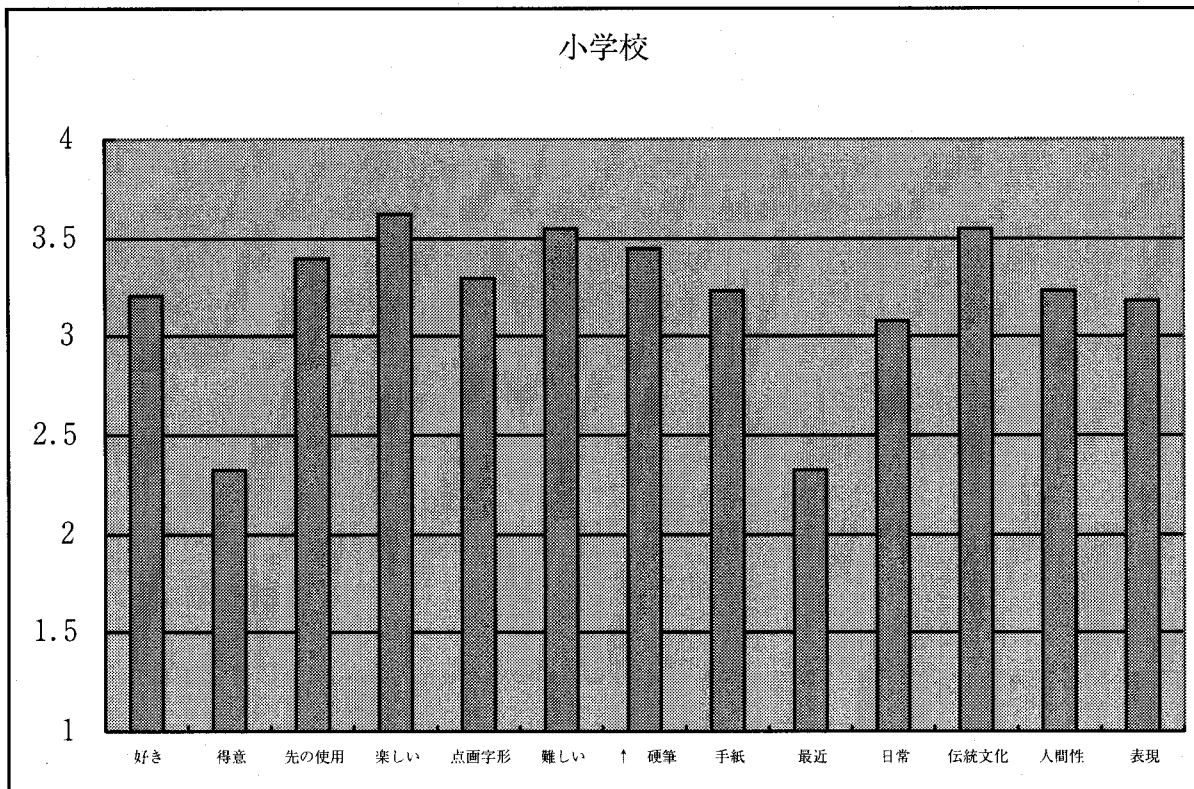
③最終画のはねの方向

- ◎ 曲がりからの運筆を一度止め、方向を変えて真上に筆先をまとめてはねている。
- 一度止めているが、極端に内側にはねるなどしている。
- △ はねの形状になっていない。

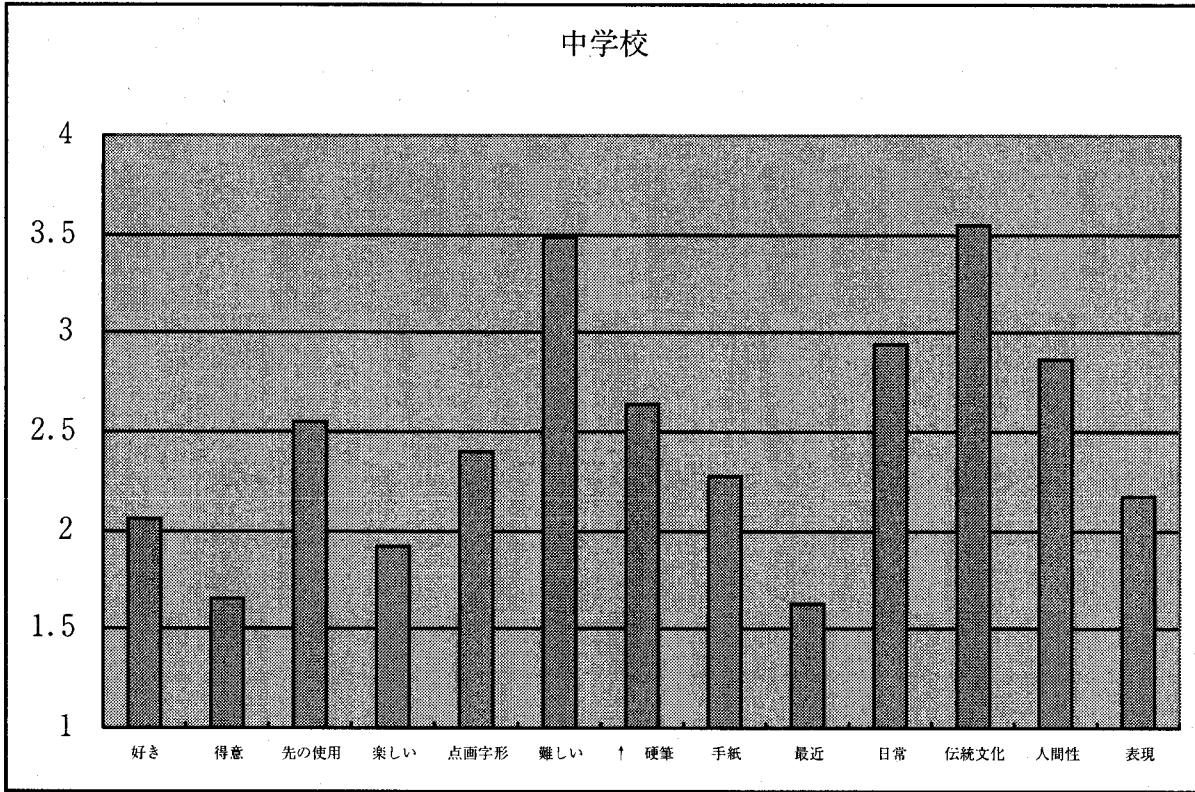
5 調査の結果 — 分析と考察

5.1 <調査1> 「毛筆に関する意識調査」から

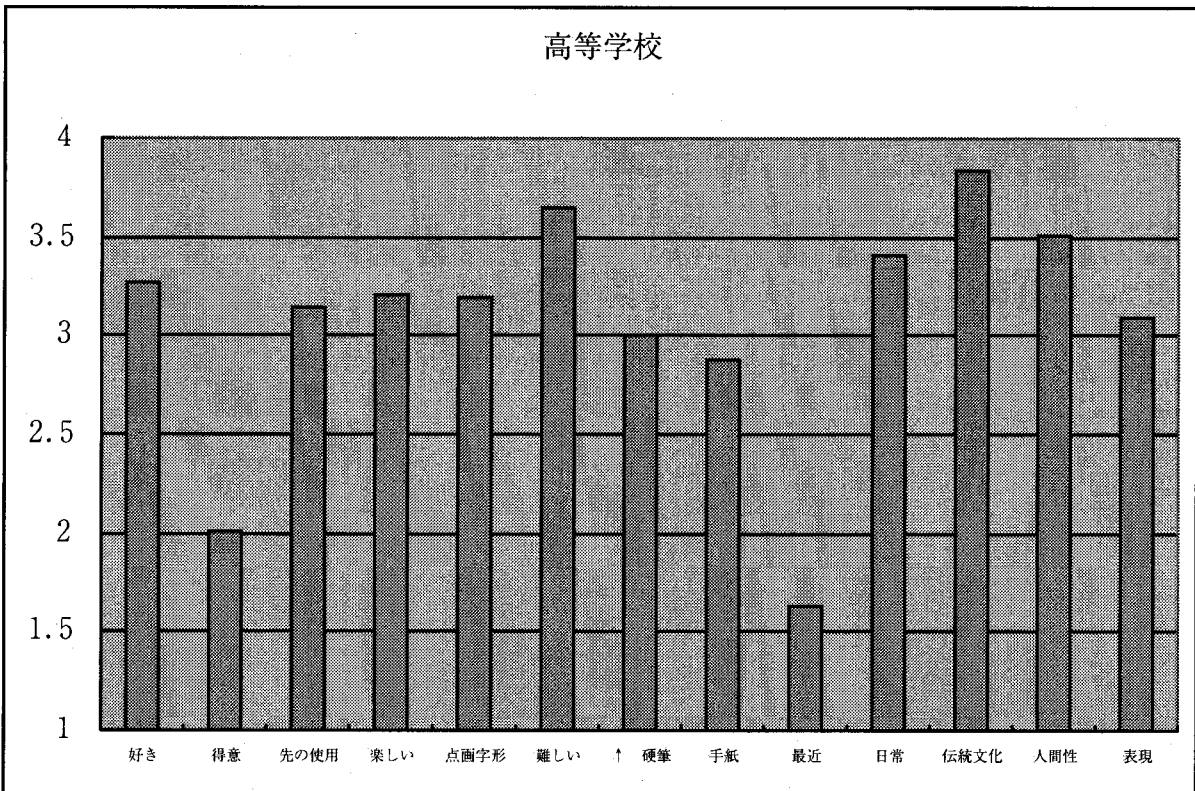
まず、調査結果を校種別に示す。



【グラフ1】



【グラフ2】



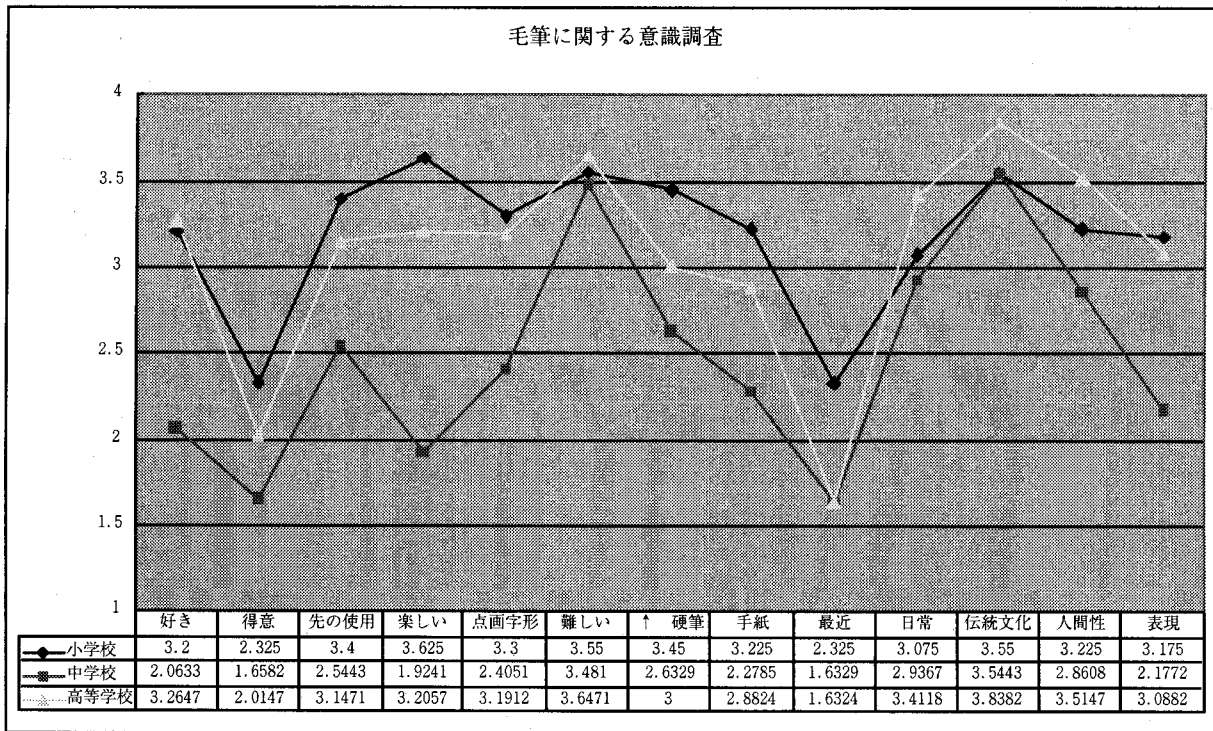
【グラフ3】



【グラフ1】小学校（5年生）では、総じてどの項目もポイントが高い。「毛筆を使用して文字を書くことは得意ですか」という問いに対しては低い数値となっているが、これは「最近、授業や塾以外で毛筆を用いて文字を書いたことがありますか」という問いに対する回答が低い数値となっていることに関連していると考えられる。つまり、毛筆を使用することが少なくなっている現代社会では、「得意」といえるほど毛筆に習熟することが困難になっており、それが「毛筆で文字を書くことは難しいと感じていますか」という問いに対する回答の高い数値として反映している。反面、「学校での毛筆を使用した活動は楽しいですか」の問いに対する回答がもっとも高い数値として現れたことは、指導者にとって朗報であろう。

【グラフ2】（中学校1年生）では、全体的に数値の落ち込みが見られ、【グラフ3】（高等学校1年生）では回復傾向が見られる。

次に、校種を重ねて示す。校種間の差異が明確に示せるよう、あえて折れ線グラフを採用した。



【グラフ4】

【グラフ4】から全校種に共通して読みとれる特徴は、毛筆という用具を扱うことは難しいと感じており、その結果、毛筆を用いて文字を書くことに苦手意識こそあれ、自信を持っている者はほんの少数に過ぎないということである。また、毛筆から感じられるイメージのもっとも顕著なものは日本の「伝統文化」を支える一つの要素であるということであり、今後の毛筆の使用についても肯定的に捉えている。そして、身の回りに筆文字が存在することや自らが毛筆の手紙を目にすることに快さを持っているものの、その反面、自分自身が学校や塾以外で筆を持つことはあまりしていない。

次に校種ごとにその相違を観察してみると、小学校と高等学校が比較的似た数値を示しているのに対し、中学校で大きく数値が異なる部分が散見される。「毛筆で文字を書くことが好きか」「学校での毛筆を用いた活動は楽しいか」「感情を毛筆を使って表現するのは楽しいと思うか」という三つの問いで、そのいずれもが大きく「思わない」の方に傾いている。特に「楽しいか」という問いに対する回答は小学校、高等学校と1ポイント以上も開きがあり、意外とも言うべき値であった。これについては、なお、慎重に検討を加える必要性を感じるが、行書をはじめ、その学習要素が多岐にわたり高度化していることがその要因の一つと考えられる。もちろん、高等学校

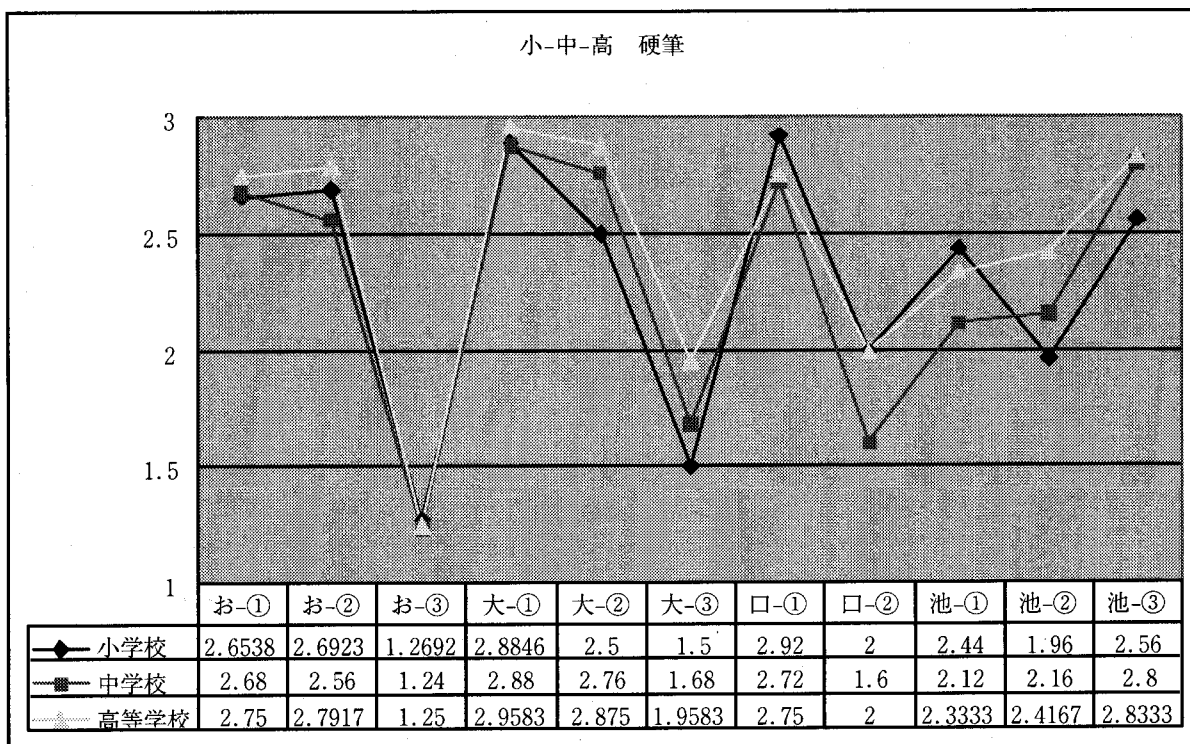
ではより高度化しているとも考えられるが、一方、自らの感興に応じて表現方法を選択したり、用具・用材を工夫できるなどの余地が大きく、その点で「楽しい」と感じる割合も大きくなっているものと考えても良いであろう。また、高等学校の被験者が書道選択者に限られていることも考慮の対象として捉えるべきかもしれない。しかし、書道選択者が他の芸術科目選択者に比べて毛筆に対していかほどか肯定的な意識を持っていたとしても、それほど大きな差異はないのではなかろうか。

そして、毛筆の将来という側面に目を転じてみると、「これから先も使われると思うか」の問いにある程度の値が示されたこと、「点画や字形が理解しやすいか」の問いにも同様であったことから、文字を獲得していく上での学習用具として認識されていると考えられる。さらに、少なくとも意識の上では毛筆の上達が硬筆の上達に役立つと感じている児童、生徒も多いことが見て取れた。

## 5.2<調査2>「毛筆の表現力に関する実証調査」から

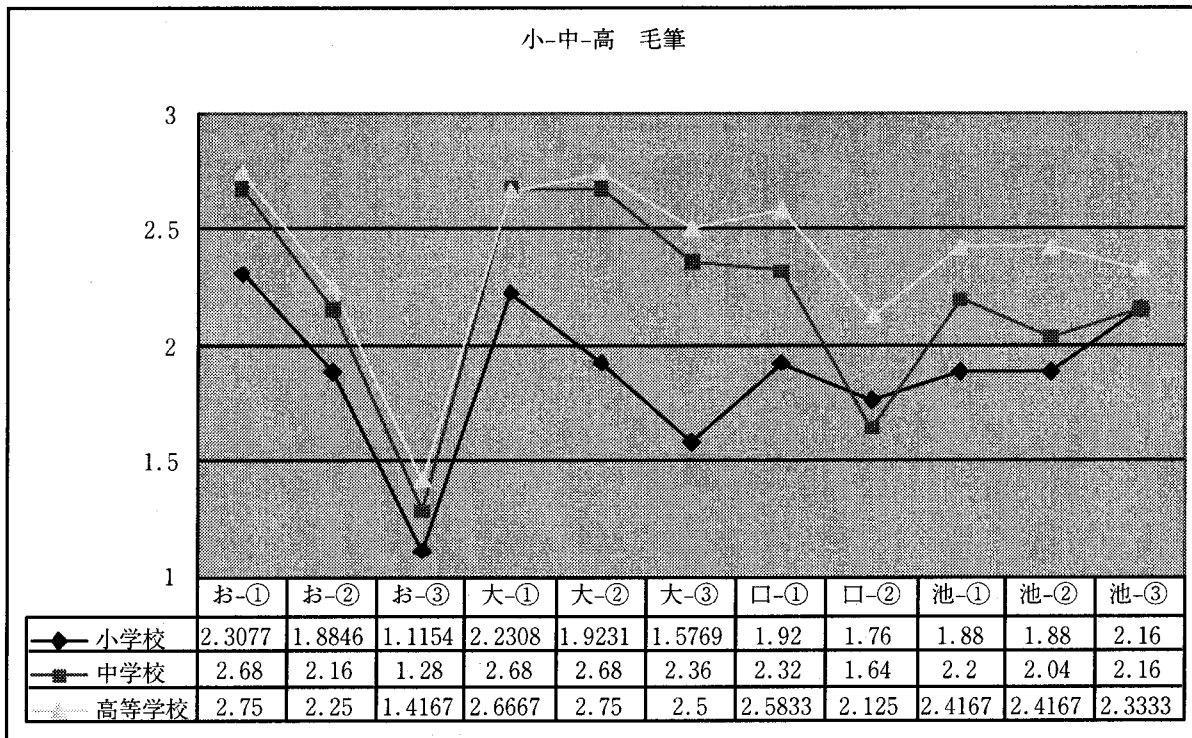
### 5.2.1 校種間の相違

【グラフ5】のとおり硬筆では、ほとんどの観点について校種間において大きな差異は見られなかったことから、小学校で学習されそして定着したものは維持され、定着しなかったものは高等学校に至ってもそれほど改善されない状況が伺える。また、設定した観点にもよるが、習得しやすい項目とそうでない項目とがはっきりと分かれる結果となった。



【グラフ5】

【グラフ6】によると全体的には小学校から中学校、そして高等学校に至るにつれて毛筆の定着度が高くなっている状況が伺える。特に「大」の横画の起筆の角度や形状、右上がりの角度、左右の払いまた、「口」の転折の形状などが中学校・高等学校では大きく改善されている。小学校3年から使用され始める毛筆が小学校段階では余り定着を見ないが、中学校を経て高等学校、つまりは「書写」から芸術科の「書道」に至って、毛筆の表現力が徐々に高まってきたと考えられる。このことは、毛筆の継続的な使用が、ある一定の成果を挙げていると考えることもできよう。



【グラフ6】

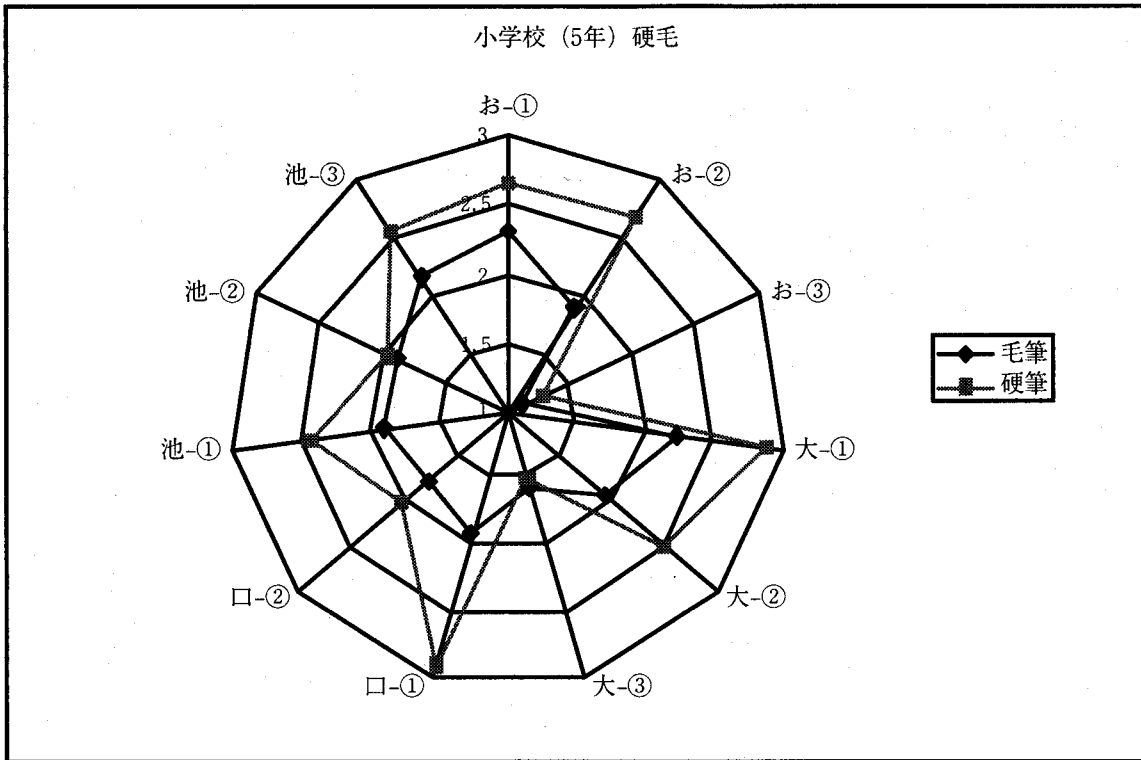
### 5.2.2 毛筆と硬筆の関連

【グラフ7】によると小学校（5年）では硬筆の定着度が毛筆より全体的に高く、小学校3年から使用している毛筆を十分に使えない状況が伺える。特に「お」の回転運動、つまり筆のねじれや「口」の転折、筆圧を加えて方向を変える動作に苦勞している姿が見て取れる。また、毛筆で定着度が低いものは硬筆でも低く、硬筆の定着度はほぼ連関している。

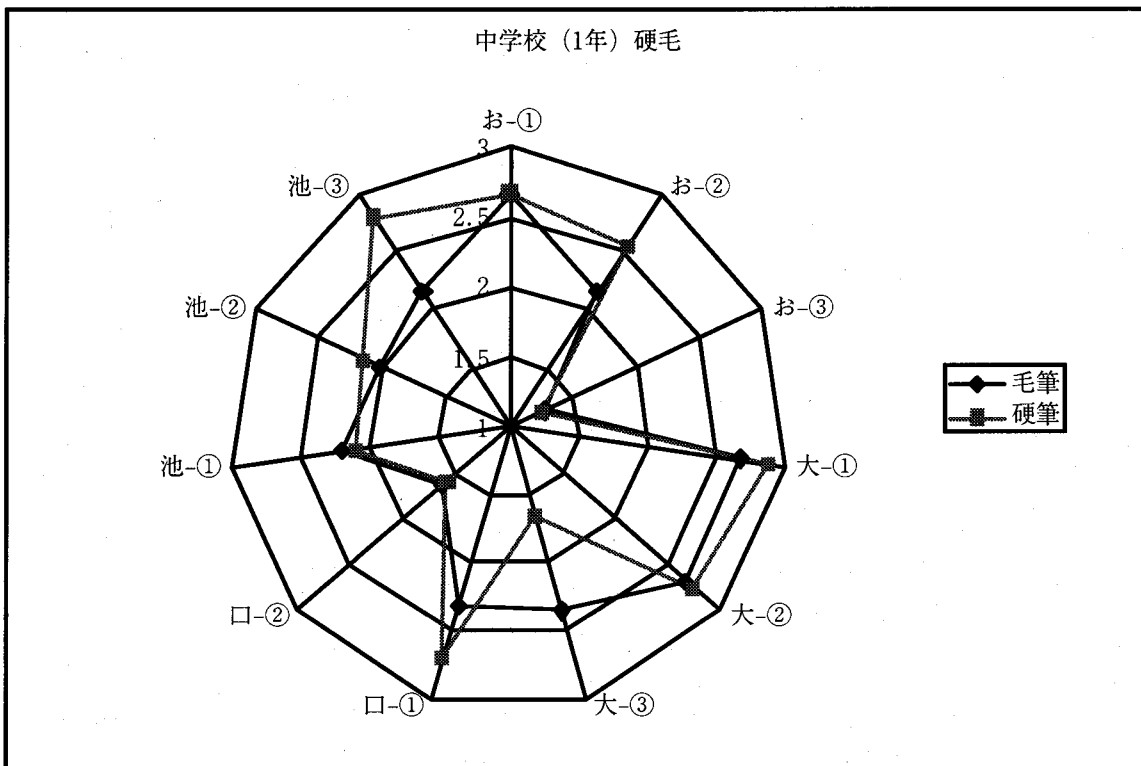
【グラフ8】の中学校（1年）では硬筆の定着度の差がほとんどなくなり、徐々に毛筆が扱えるようになっていく。「大」の払いの形状は定着度が逆転していて興味深い。毛筆では、筆圧や方向の変化が明確に意識されているのに、硬筆になるとその意識はほとんど消えている。これは、書写能力として定着しているか否かではなくて、硬筆では右払いと左払いを書き分ける必要性を感じていないということであろう。

【グラフ9】の高等学校（1年）では中学校よりさらに硬筆の定着度の差がなくなっている。この調査自体が書道の時間を活用して行われていることを差し引いても、全体的に見れば毛筆で培われた能力が硬筆でも生かされていると考えることができるであろう。ただし、「お」の第二筆と第三筆との関連については、毛筆、硬筆ともほとんど定着を見ていない。このことは、中学校から学習している行書の学習成果が平仮名にはフィードバックされていないこと、また、多く指摘されるように横書きの多用により字形やそれを成り立たせる運筆に歪みを生じている結果であると考えられる。「大」の払いについては中学校と同様である。

【グラフ7】、【グラフ8】、【グラフ9】を比較すると、小学校においてはほとんどの観点について硬筆の定着度が高いが、中学校から高等学校にいたって硬・毛ともにそれぞれ定着度は高くなっていくが、硬筆の差は徐々になくなってきている。

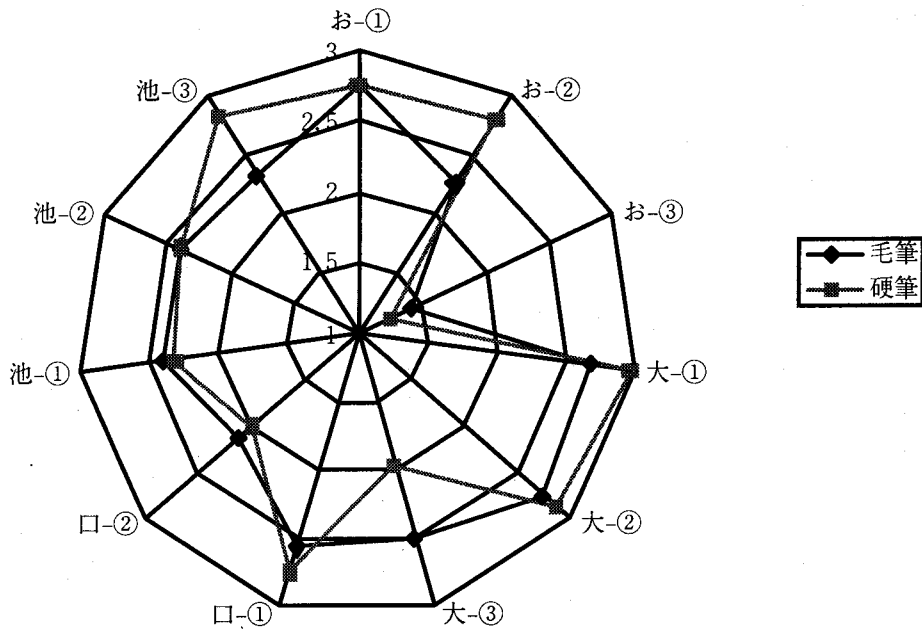


【グラフ7】



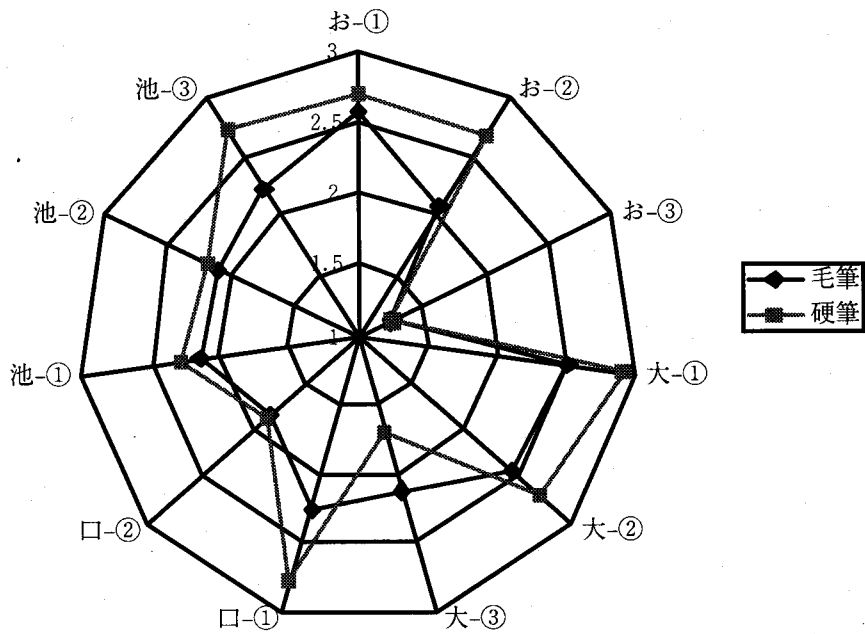
【グラフ8】

高等学校（1年）硬毛



【グラフ9】

全校種 硬毛の関連



【グラフ10】

【グラフ10】では、全校種を総合してグラフ化してある。それによると、前述したとおり「お」の第二筆と第三筆の関連の凹みをもっとも大きい。これは筆脈の関連という比較的高度ともとれる学習項目を小・中・高でどのように意識させていくのかを再考しなければならないことを示している。換言すれば、書き終わった字姿を問題にするよりも、書き進める過程を重視した学習指導が求められていると言えるであろう。次に定着度が低いと思われるのは「口」の二箇所の接筆である。比較的理解しやすい「口」の接筆の定着度の低さは、普段最も目にする明朝体活字「口」との相違の影響などが考えられよう。環境が児童、生徒に与える影響はとても大きい。活字をはじめ、彼らを巡る文字環境がどのような状態にありどう変化しているのか、また、書字との関係はどう捉えたらよいのかを見据えていくことも必要であろう。そして、全体を通して、硬毛の定着度はほぼ連関しているが、「大」の払いの形状のみが中学校、高等学校では毛筆のほうが相対的に高くなっている。これは左右の払いがより毛筆で特徴的に表現できる点画であるにも関わらず、硬筆ではそれが生かされていない事例であり、「毛筆は硬筆の基礎」という枠組みからはみ出しているものと捉えられる。

### 5.3二つの調査から考えられること

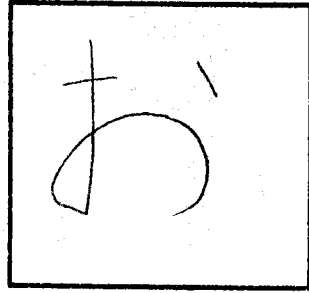
毛筆を扱うことは難しい。そう多くの児童、生徒は考えている。調査した字例が少ないため、確定的なことは言えないが、表現されたものを観察すれば、難しいと感じさせる筆使いはさほど多くないのではなかろうか。獲得しづらい用筆はどのようなものなのかを把握し、それについて効果的な指導法が提示できれば、難しいと感じる比率は徐々に下がってくるのではないだろうか。大部分で「毛筆は硬筆の基礎」と言ってもよいと思われる関係が把握された。一部認められない事例もあったが、指導の改善をもって克服可能であると考えられる。児童、生徒の中には学習用具として、文字の獲得、文字の上達に寄与するものとして毛筆を意識している者は多い。そして、幸いなことに、毛筆を用いた学習を楽しんでいると感じたり、好感を持っている者も比較的多いのである。また、文化的、歴史的な存在としてしっかりと評価をしているし、今後も価値あるものとして尊重していく基盤はできていると考えてよさそう。書き進める過程を効果的に、よりリアルに体験を通して学ぶことの中に、毛筆を有効活用していくことが求められていると考えたい。

## 6 おわりに — 今後の方向性

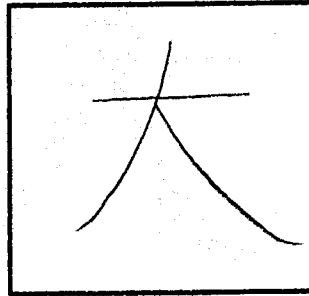
研究の端緒は、小、中、高の書写書道を預かる教員が自らが勤務する校種を越えて児童、生徒の実態を把握し、今後の指導改善に生かしていきたいということだった。今回の調査・研究を通じてその一端は見えてきたのではないかと考えている。例えば、毛筆のねじれが毛筆を扱うことが困難であると感じさせているということ、筆脈の意識は毛筆での学習成果が期待される学習項目と考えられるが、十分な成果が上がっていないということ、活字の字形の影響が少なからず、毛筆を含めた手書き文字に影響していることなどである。今後まず取り組むべきは、それぞれの教員がこの結果を踏まえて日常の授業改善をいかに図るかということであろう。次に、校種を越えて協力すべきことは何かを明らかにし、行動に移していくことと考える。特に、書き進める過程をどう意識させて取り組ませるか、全校種にまたがっている大きな課題として明記しておく必要があると思う。

さらに、附属学校としてさらに取り組めることを模索していきたい。附属である以上、多くの児童、生徒が小・中・高と進学してくる。教員の日常的な相互交流をもっと活発化させる必要があるだろう。そこに、いかに大学教員が有効性を持って参画できるかも重要な側面として認識されるであろう。

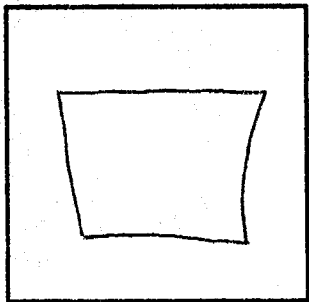
お



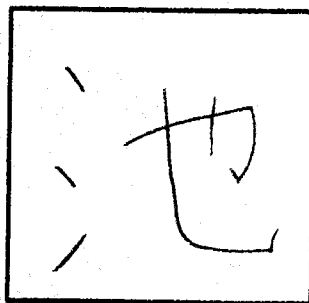
大



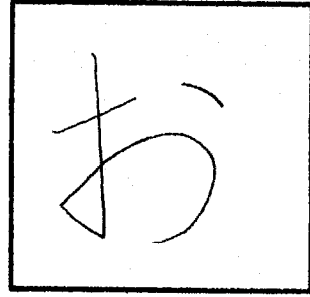
口



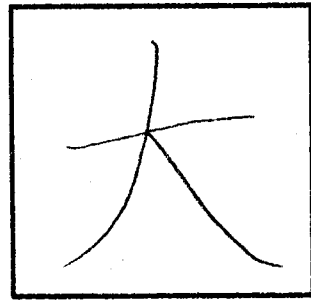
池



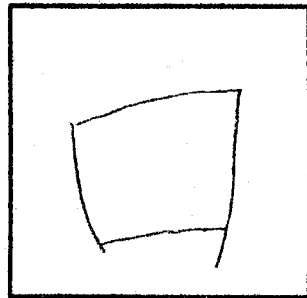
お



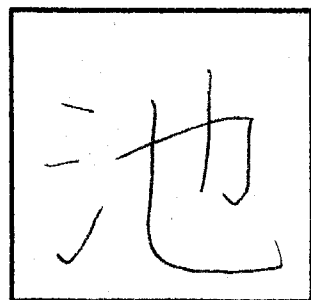
大



口

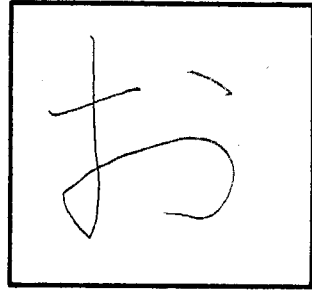


池

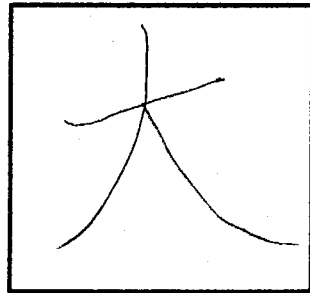




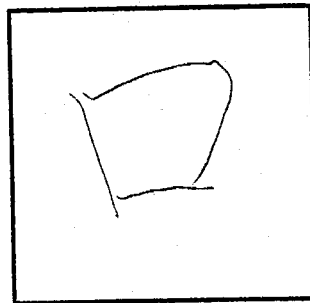
お



大



口



池

